

## 中琉学会——第六回会議から課題と展望を探る

上里 賢一

中・琉歴史関係学術研討会（以下「中琉学会」）は、十月二十九日、中国第一歴史檔案館館長・徐芸圃氏による開会のあいさつで始まり、高宮広衛（沖縄側団長・沖縄国際大学教授）、王耀華氏（福建師範大学副学長・徐恭生同教授代読）、彭炳進氏（中琉文化経済協会理事長・中国文化大学教授）、趙令揚（香港大学教授）ら各地区代表による北京大会を迎えた喜びのあいさつが行われた。

開会セレモニーのあと、参加者全員の記念撮影。休憩をはさんで、特定論題の報告と討論があった。報告と論題は次のとおり。

陳捷先氏（台湾大学名誉教授）「康熙帝の琉球関係の継続と強化に対する貢献」、照屋善彦氏（琉球大学教授）「西力東漸と琉球」、徐恭生氏「陳侃と『使琉球録』」。

陳氏の報告は、中国における明清交代期と薩摩の琉球侵攻等によって一時期混乱した中琉関係を、康熙帝が見事に立て直し、さらに前進させたことを、使録や『大清会典』、『起居注』等の資料を駆使して明らかにした。照屋氏は、十九世紀前半に琉球に来た西洋人の観察記録を検討して、日本との対比で日本が尚武の国で

あるのに対し、琉球は尚文の国で武器がないという美しい誤解がどのようにして形成されたかを論じた。

徐氏は、陳侃の使録が明代の冊封使録の中で残っている最初のもので、以後の使録の規範となって重視された事を確認したうえで、その内容が従来の評価にふさわしいものであることを実証した。とくに同使録中の天妃についての記録は、以後の使録のひな形としての性格をもつことを指摘した。

午後は会場を政治史・経済関係と文化史・檔案関係の二つに分けて研究発表が行われ、翌日は三コースに分かれての史跡参観があり、三日目は、午前中は二つの会場での研究発表、午後は西里喜行氏（琉球大学教授）「中琉関係史中の土通事と牙行（球商）」、楊冬権氏（国家檔案局弁公室主任）「明代国子監の琉球官生考」、徐玉虎氏（国立政治大学教授）「清代冊封使全魁と周煌の著作に残る琉球について」の三つの特定論題の報告と討論、閉会式が行われた。

全体会議での六編の特定論題と、二つの分科会における三十一編の報告（論文報告のみ三編をふくむ）、および当日論文だけ届けられたものが一編あったので、提出された論文は合計三十八編となる。三十八編の論文は歴史、経済（貿易）、文化交流、宗教、官生、文学、民俗、建築等の分野にわたる。

それぞれの報告について、紹介する余裕はないので、沖縄側の報告者について、その題目だけを示しておくことにする。

「政治史・経済関係」分科会（四人）。池宮正治氏「上表渡しと勅書迎えの儀式」、田名真之氏「明清交代と琉球」、深沢秋人氏「清代における琉球使節の再検討―渡唐役人としての勤学人を中心に」、豊見山和行氏「琉球国における冠船貿易の実態」。

「文化史・档案関係」分科会（五人）。上江洲安亨氏「清朝初期における琉球の官生派遣に対する謝恩の貢物について」、上里（筆者）「孫衣言と琉球官生」、赤嶺守氏「清代中琉関係档案史料の電子情報化について―『清代中琉関係档案統編』を中心に」、宮城昌保氏「琉球への食の伝播（麵食伝播再編）」、苦瓜和宏氏「中国との交流における琉球伝統料理について」（論文報告）。

報告全体の特徴は、第一に档案関係の発表が多かったことである。档案を対象としたものが六編あり、档案を利用した報告も数えると十編以上にもなる。第二に、官生や勤学等、留学生を対象とした報告が五編あったこと。これらは、沖縄県が推進している『歴代宝案』編集事業とのからみで、福建師範大学の徐恭生・謝必震氏らが北京の第一歴史档案馆の琉球関係資料の発掘に尽力し、その成果を『清代中琉関係档案選編』『同統編』『同三編』として出版していることが、档案資料を利用しやすい身近なものとしており、それが研究に反映していると言えるだろう。

「中琉学会」が開かれるきっかけは、一九八三年十月二十六日―三十日の琉球学術文化親善交流団（団長・島尻勝太郎、当時沖

縄大学教授、以下、「島尻訪問団」と呼ぶ）の台湾訪問であった。メンバーは島尻団長以下、又吉盛清（当時浦添市史編集室）、我部政男（琉球大学）、比屋根照夫（同）、比嘉政夫（同）、上里賢一（同）、糸数兼治（沖縄県教育庁文化課）、渡名喜明（同）、宮城保（沖縄県立図書館）、田名真之（那覇市史編集室）、渡口善明（沖縄マイクロセンター）、松島弘明（琉球新報）の十二名である。そのころ台湾は戒嚴令下にあり、日本との外交関係は断絶しており、学術的にも門戸を開いていなかった。しかし、沖縄にとつては歴史的にも緊密な関係にあるもつとも近い外国であり、政治の動向に左右されない学術的絆を築くために何か始めなければならぬ、その糸口をつかみたい―これが、島尻訪問団の目的であった。その当時の記憶をたどると、今でも胸の高鳴りを覚える。台湾との学術交流の原則を確立し、以後の研究者の交流や資料の交換が着実に進み成果をあげているのは、まさに、この訪問がきっかけであった。台湾大学付属図書館で見た台北帝大時代の膨大な蔵書、国立中央図書館台湾分館の琉球関係資料と台湾資料、故宮博物院の世界的宝物と档案資料、台湾省文献委員会にある日本統治時代の総督府文書等々、「来るのが遅かった」「あと十歳若ければ」と団員を慨嘆させるものばかりであった。興奮して帰国した団員は、すぐに台湾との研究者の交流、資料交換のための具体的な取り組みをはじめた。いちいち上げる余裕はないが、「中琉学会」の開催と継続もその具体的な取り組みの成果の一つである

ことは言うまでもない。

この「島尻訪問団」は、沖縄で組織された学術中心の交流団としては、戦後初めての学際的な性格をもった本格的なものであった。それ以前にも個別分野の研究者が、それぞれ独自の交流をしていたが、それは個人的レベルの交流の域を出ていなかったと言つて良く、したがつて、研究者の間ではもちろん、社会的にもそれほど話題にもならず、台湾はその地理的距離の何倍も遠い存在として忘却の彼方にあつた。

参加した動機も関心領域もそれぞれ異なる団員だが、台湾に対する熱い思いは一つであつた。出発の一月前に台湾大学の陳捷先教授が、教授の下で研究中の留学生・赤嶺守氏（現琉球大学教授）と共に来島され、台湾の研究者や研究機関についての紹介があつた。これは台湾訪問に対する警戒感を軽減し、資料調査と研究交流の可能性を膨らませるうえで大きな効果があつた。

お二方は、その後の沖縄と台湾の学術交流の事実上の中心的な存在となり（「中琉学会」の企画・運営もほとんどその力に頼りきっている）、その意味では、お二方は「中琉学会」の生みの親であり、育ての親であると言える。

「島尻訪問団」が大きな成果をあげ、その後の交流のきっかけを作りえたのは、われわれが以後に「島尻三原則」と呼んで、外国との学術交流の基本的ルールとしている理念を持っていたからだと思う。それは、①資料の調査と収集にあたっては、性急に閲

覧や提供を求めない。相手方のために何ができるか、我々の方から提供できるものはないかを第一に考えること。②専門領域を異にするとは言え、団員は沖縄を代表しているつもりで、全員でよく話し合い相談しあつて事を処理し、くれぐれも個人行動に走らないこと。③台湾の状況に配慮し、協力してくれる機関・個人に迷惑を掛けることがないように十分配慮し、今後の交流の基礎と条件を整えるため、誠意をもつて接し交流を深めること。

出発前の空港で、島尻団長が力説した「三原則」は、今も胸に鳴り続けている。「初心忘るべからず」。

この「島尻訪問団」は、大学や研究機関等での資料調査のほか、大学をはじめとする各研究機関の研究者と積極的な意見交換を展開した。その中で、台湾大学の曹永和氏が司会役になって、喫茶画廊（紫藤蘆）の奥まった座敷で展開された座談会の様子は今でも忘れられない。それぞれメンバーから離れた島としての地勢的類似性と、島の独自性の獲得の課題、自らの島の運命を他律的に外から強制される歴史の共通性、将来の地位をめぐる双方の苦悩等が、緊張した雰囲気の中で展開された。

薩摩の琉球侵攻や明治政府による琉球処分の評価等をめぐっては、方法の激しいやりとりもあつた。また、地元紙『聯合報』の運営する「国文学文献館」主催で学術討論会があり、筆者が琉球における漢詩文の研究状況と課題について報告し、梁嘉彬氏、楊雲萍氏ら台湾を代表する研究者らのコメントがあり、おおいに刺激

になったことも、印象深い出来事として脳裏に焼きついている。このように、最初の台湾訪問の時から、学術交流が実際に展開されたわけである。

帰国後、翌年には曹永和氏を琉球大学アジア研究会で招待、琉球大学と浦添市民会館で講演会を開いたのをはじめ、台湾大学講師・呉密察氏を招いて交流し、一九八五年には、中国文化大学教授・徐玉虎氏ら一行七人の研究者の来沖があり、定期的な学術交流の機会を作ろうという機運は一気に盛り上がっていった。こうして、第一回中琉歴史関係国際学術会議（以下、「中琉学会」と略す）の翌年開催が決まった。

第一回「中琉学会」の持ち方については、滞在費、発表者への謝礼、原稿料等が、主催者の中琉文化経済協会から支給されることをめぐって、日本の学会の慣例にないこと、第二回以降沖縄で開く場合、これに準ずるやり方が実施不可能であることなどが議論の焦点となり、あくまでも自己負担による自費参加にすべきだと主張して、参加をみあわせる者もいた。この議論は、以後の会議に反映され、滞在費は開催地負担、旅費その他は自己負担を原則として確立し、現在にいたっている。

台湾・沖縄双方の熱意が結実して、一九八六年十一月二十二日台北市で、第一回学会が開かれた。発表論文二十四編（沖縄十一、県外二、台湾九、韓国二）。第二回学会は一九八八年十一月十三日、十四日に那覇市で開かれた。発表論文二十八編（沖縄十、県

外一、台湾十五、韓国二）。第三回（一九九〇年十一月十五日～二十日・台北）、発表論文三十九編（沖縄十六、県外四、台湾十一、韓国二、米国二、カナダ一、中国大陸三）。論文だけの参加ではあるが、このとき初めて王耀華（福建師範大学教授）、謝必震（同講師）、楊国楨（廈門大学教授）が参加したことが、特筆される。第四回（一九九二年十一月二十一日～二十二日・那覇）、発表論文二十八編（沖縄七、県外五、台湾十、中国大陸五、韓国一）。この時福建と北京の研究者が初参加。今回の福建開催が決まる。

第五回（一九九四年十一月二十四日～二十七日・福州、泉州）、発表論文三十九編（沖縄十一、県外三、台湾八、中国大陸二十七）。初めて中国大陸で開催。第六回（一九九六年十一月二十八日～十一月一日・北京）、発表論文三十八編（沖縄十一、県外三、台湾七、中国大陸十七）。そして、今回は九八年台湾で開催予定。

台湾と沖縄が中心となって、日本本土、韓国、福建、北京、香港をつなぎ、さらに米国、カナダへと広がっている様子がわかるだろう。報告論文の内容にふれられないのが残念だが、第五回までは報告論文集が出版されているので、それを参考にされたい。なお、第六回の論文集は今年、香港の出版社から出る予定である。

第一回会議の開催から、すでに十四年の歴史を刻んだ「中琉学会」は、その規模、内容とも我々の当初の予想を超える勢いで発展充実してきた。学会は、中国・沖縄双方のマスコミがその都度

大きな話題として報道してきたことにも見られるように、毎回中国と沖縄の交流史に残るような学術的成果をあげてきた。同時に、明・清代の中国と琉球の關係史という学術的課題を接点に、政治的に複雑で困難な課題の多い中国大陆と台湾の研究者の橋渡しの役割を、沖縄の研究者が果たしたいという夢は意外に早く実現した。そして今日、琉球（沖縄）をキーワードにして、中国大陆、台湾、韓国、香港、米国等、広い範囲の研究者の交流の輪が大きな広がりを見せ、活況を呈している。

このように順調な成果をあげつつある学会であるが、今回の北京大会を経て次の台北大会へ向けて、会議は明らかに一つの歴史的な転機にさしかかったと言える。これまでの成果を踏まえ、次の飛躍へつなげて行くために、われわれはいくつかの課題を抱えている。

第一に学会の名称の問題がある。「中琉歴史関係国際学術会議」の名称は、第一回から第四回まで使われている。台湾と沖縄だけで開催し、出席者もこの二地区の研究者が中心になるなら問題にされることもなかったろうが、第五回の福建省福州・泉州での学会と今回の北京においては、「中琉歴史関係学術研討会」という名称になっている。

これには、台北と福建・北京の関係者の苦悩がそのまま反映している。「国際」という呼称を入れるかどうかは、いくら純粹に学術的な会議だとは言っても、台北と福建・北京の開催地にとつ

ては、どうでも良い問題ではないということだ。

台北にとっても福建・北京にとっても、中国は一つである。しかし、現実には、それぞれに政府があつて、そのいずれもも正当性を主張している。政治の干渉を受けずに双方の研究者の自由な研究交流を実現するためには、開催地は自国の政府や住民の感情に配慮しなければならない。

次の台北での会議でどの名称を使うか、その調整役は沖縄が果たさなければならない立場にある。台湾と大陸の当事者から率直な意見を出してもらつて、双方の立場を損ねないような案を作らなければならない。

「会議」とするか「研討会」とするかも、あわせて議論してみてもどうだろうか。第五回の福建省の場合は、「研討会」を使い、報告集では第一回からの呼称を踏襲して「会議」としている。開催地によって少しずつ変わるというのも、面白いかもしれないが、学会の在り方としては、やはり変則的であろう。

第二に事務局の体制とその運営上のことについてである。自身の会員としての自覚不足と責任感の欠如を棚にあげて、愚痴っぽいことをいうのは気の重いことだ。これが、私の認識不足であれば幸いである。

素直に言つて現在の沖縄側の事務局は、特定の人に仕事が集集中して過重な負担を強いている。事務局と会員との関係が希薄で、会員はほとんど活動の内容と運営について発言する機会がなく、

二年に一回の学会に参加するだけになっている。ゆるやかでファジーなところが、この学会の良い所だが、同時に課題でもある。会員としての自覚と責任をもってもらうためにも、また、通信費や諸雑費を一部事務局員に負担させたままにしないためにも、年会費制にするなど何らかの改善が必要である。

第三に、学会の持ち方である。発表者の数が増えることは歓迎すべきことだが、そのために討論して論点を深める時間がなく、言いつ放しで終わってしまうことがある。使用言語や通訳の問題など、困難な条件はあるが、工夫してみるべきであろう。

第四に、第五回と今回韓国からの参加がなかったこと。次の台北の開催時にはぜひとも参加してもらいたいものである。そのために沖縄側からどのようなアクションをおこすべきか、ただ静観するのみで良いのか、話し合っておくべきだろう。

いずれにしても、この学会を広く県内の研究者に開放し、一般の市民の方にも関心を寄せてもらって、県民の宝として育てていくようにしたいものだ。そのためにも、会員相互の意志疎通をもっと生き生きとしたものにし、会員の知恵と力を結集すべく、年一―二回程度定期的に会合を開くことを提案したい。自戒も含めての希望である。

## 第六届中琉历史关系学术研讨会

